日本医史学会会報

四二号（復刊）

平成一八年九月三〇日

第一〇八回日本医史学会総会を開催するにあたって……会―1
第一〇七回日本医史学会総会印象記……会―2
第一〇七回日本医史学会総会報告……会―6
支部・研究会だより……会―16
雑報・寄贈本リスト……会―24

第一〇八回日本医史学会総会を開催するにあたって

総会会長　田中　祐尾（さちお）

平成十八年度日本医史学会総会の承諾を得て、第一〇八回総会会長に指名されましたので一言ご挨拶申し上げます。

大阪において当会総会が開かれるのは、実に三十二年振りの事で少々意外な気も致します。

前回は故中野操先生の会長で、昭和五〇年に大阪大学松下会館にて開かれ、特別講演が杉浦守邦先生の「日本学校保健史」と藤野桓三郎先生「日本細菌学小史」でありました。会期以降に大阪府医師会が中野先生の肝入りでバスを仕立てて「なにわ医学史蹟めぐり」なるものを挙行されました。

今回は奇しくも四年に一度の第二十七回日本医学会総会が大阪で開催される予定でありまして、この第一分科会である当会が大阪の土地で併催されることが大いに意義深いことと認識致しております。

大阪（明治二年頃までは大坂―オオザカ）の医学史を紐解くということになりますと、まるで砂に埋もれかけた恐竜の骨格を掘り起こすようなとてつも無さを感じます。古くは現関西支部の前身であります「杏林温故会」の創立者たちや阿知波五郎先生、そして宗田一先生らの優れた業績

があり、現在も関西支部をはじめ多くの学究たちが個々の実績を挙げらるるについて枚挙に暇なき次第であります。然しながら大阪の医学史を一堂に会して披瀝する機会には久しく恵まれておりません。

然らば二日間で近世以降の大阪の医学そのものを語り尽くせるかの問いには、無理であると申し上げるほかありません。

今回は十六世紀終末において既に大阪城において接触のあった南蛮医学から始まり、十九世紀初頭に隆盛期を迎える紅毛医学、そして幕末から明治への蘭学に焦点をあてることにより、一応の体裁を整える積もりです。

大阪には町民の経済力が最後まで学問を支え続けた歴史がありまして、自由闊達でやりたい放題の気風さえ伺え、その点が大きな特徴であります。私も失敗を恐れず庶民文化の一翼としての「大坂の医学」を開陳し、次ぎの走者（総会会長）にバトンをお渡しすることを本義といたします。格段のご理解とご支援を今からお願致します。

第一〇七回日本医史学会総会印象記

大阪市立大学医学部　田中　祐尾（さちお）

第一〇七回日本医史学会総会・学術大会は平成十八年五月十三日、十四日の両日、医療法人玄真堂川嶌真人氏を会長に、大分県中津市文化会館で開催されました。奥平侯十萬石、現人口八万人という落ち着いた佇まいの街で、数々の蘭学関係の史跡が目白押し、長年に亘る川嶌先生による地元での調査の蓄積もあって、市民の歴史への知的関心度の高さを感じました。

本大会は一般講演六五、招待講演一、特別講演一、会長講演一、シンポジウム・市民公開講座といった盛況で一般講演はA、B二会場に別れ滞りなく進行しました。A会場は千人収容の大ホールで、最終の市民公開講座は中津市長を始め地元の主立った文化人、一般市民で満員の熱気に包まれました。

山王精神医学心理学研究所の鈴木二郎氏の招待講演は『精神医学の先達・国際人向笠広次』と題し、久留米出身の精神科医師向笠広次（むかさ　ひろじ）の九州大学での「分裂病治療に対する電気痙攣療法」の研究とその後の鬱病治療への応用。嫌酒剤としてのシアナマイドの開発などについて紹介。終戦後アルバイトで勤務した中津市内平田医院との縁により昭和三三年に中津市殿町にベッド数二十の精神科を設立。九大、久留米大にも勤務、昭和三七年に中津ロータリークラブの会長を経て五三年には国際ロータリー会長に就任された。晩年は川嶌院長にリュウマチの治療を受けつつロータリアンからの寄付で中津市船場町に向笠記念公園が完成した。平成四年に永眠される最後の日まで「人類は一つ」の思想を呼びかけたという聖人とも言うべき

中津の医人について、まことに要を得たご発表でありました。

特別講演『日本整形外科の歴史と田代家』は蒲原宏日本医史学会理事長により約一時間。まず日本の近代整形外科の創設について、整形外科という科名決定の事情、九大・東大・京大三大学での講座創設と人材の育成、整形外科の社会活動への進出など驚異的なエネルギーと洞察力を発揮した田代義徳の業績の数々。そして田代家の家系を追うことにより、田代義徳を入り婿として迎えた義父基徳の人となりを分析、まず後顧の憂いなくドイツ私費留学をさせづけたこと、中津藩医の家系を継ぎ営々と伝承した包容力と勤勉、世情の裏にも通じる気風など、見事に栃木の農村出身の義徳という養子に受けつがれたと結ぶ。

会長講演は川嶌真人大会会長玄真堂院長による『中津藩蘭学とパイオニア精神―明治前後の中津医学史を中心にして―』でありました。蘭学に染まった殿様を「蘭辟大名」といわれたそうであるが、中津藩の藩主は三代奥平昌鹿、五代昌高あたりになると自ら蘭学に没入して人材を育成し日本の夜明けに繋げたという点で蘭辟でなく「蘭学大名」と名付けるべき存在であった。十九世紀に入ると学問の質量共に充実し、「蘭語訳撰」（神谷弘孝）、「中津バスタード辞書」（大江春塘）を出版。村上玄水を長崎に留学させ人体解剖を命じる。幕末には藩学者から民間医へと活動が移り藩もこれを支持する。嘉永二年辛島正庵ら中津の医師十名が長崎から中津へ痘苗をもたらし、種痘の敷延に成功、感動した市民が募金を集めて種痘館を設立、これが医学校へと発展。明治の中津医学校校長に就任した大江雲澤は華岡流医学を継承、「醫は仁ならざるの術、務めて仁をなさんと欲す」という醫訓を残す。藩からも大坂の華岡塾に五名の医師を派遣。藤野玄洋医学校長は適塾に学び長崎でもボードインに外科と眼科を学んだ。ほかにも幕末の田代基徳とその養子義徳の活躍、明治以降には田原淳による刺激伝導系の世界的発見の業績などを生み続けた。中津の学問の特徴は官民が一体となり代々取り組んだ蘭学の背景がある。藩の経済的土壌が豊かで、かつ人心が真摯勤勉でありつづけたことが窺える。天災や飢饉そして内紛などが重なる他藩と比べると実に恵まれた土地柄です。

シンポジウム

一、「天然の奇士」前野良澤　鳥井裕美子氏（大分大学）

による中津藩医前野良澤の奇人ぶり、天才ぶりの紹介。『解体新書』の翻訳以降は杉田玄白一派とは疎遠になり語学、天文、物理、兵学、医学（二冊のみ）、地理、歴史学など多数の蘭書の翻訳と研究に没頭した。蘭書から訳した『魯西亜本紀』は幕府の参考書に。蘭語の研究は単語と漢文訓読法を組み合わせるという発想で元来長崎通詞からの知識。体系化された『蘭語随筆』『仁言私設』を紹介。BALMHALTIGという単語に仁、博愛など九十もの訳語を試み

ている。オランダ文法が理解しえぬまま独特の解釈が続く。玄白のいう「漫りに人にも交わらず生涯一日のごとく動かず」といった人生で、七一才の晩年玄白が自宅を訪ねるとカムチャッカの歴史を翻訳中で動こうとしなかったという。

二、「シーボルトと奥平昌高」石田純郎氏（新見公立短大）による江戸における中津藩主奥平昌高とシーボルトとの出会いについて。映像によるシーボルトの生い立ちからブュルツブルグ大学での修学の経過などを示し、オランダ人でないシーボルトがどのように、なぜ軍医として日本へ来たかを説く。彼は医師になってわずか二年後にオランダ陸軍に雇われ破格の待遇で一八二三年に軍医として来日したが、目的は日本の地理や民俗、動植物学などの知識をまとめてオランダ本国に持ち帰ることにあった。しかしその文物や標本を得る代償として語学や医学の教育を行った。これが結果として日本のその後の文化生育の大きなエネルギーとなりその一頁に奥平昌高との出会いがあった。昌高はすでに多くのオランダ文物と知識を持っていて二人は深夜まで話し込んだ。『江戸参府紀行』に頻繁に昌高の名が記述されている。

三、「中津藩医村上玄水と大江春塘―地方蘭学者の条件と可能性について」ミヒェル・ヴォルフガング氏（九州大学）は中津の蘭学を数年間調査し、そもそもこの地の蘭学の発祥は藩主の個人的努力と好奇心によるという。三代昌鹿、五代昌高の側近（侍医）たち村上玄水と大江春塘について、その資料は玄水については豊富だが春塘のものは少ない。一方江戸と長崎へ度々出向きオランダ人との接触が多かったという点では春塘が有利な条件にあった。文政五年にはメイエルの『語彙宝函』を和訳し『バスタード辞書』を出版。玄水は中津藩刑場で画期的人体解剖を行い「解剖図説」という原稿をまとめたが刊行はできなかった。彼の業績は覚書、草稿の類が多く医学、天文、本草、地理、兵学、化学、文学に及ぶ。藩に閉じこもろうとした訳ではないが、江戸や京都からは余りにも遠く、世に問う機会を失ったが知的好奇心と視野の広さは抜きん出ていた。

四、「日本の歯科免許第一号小幡英之助」で樋口輝雄氏（日本歯科大学）は中津公園にその銅像があり五月の第二日曜日に奇しくも本年は当医史学会総会が中津で開かれる五月十三日に中津歯科医師会と大分県歯科医師会による「歯科祭」が開催されるという小幡英之助の業績について述べられた。旧中津藩出身で慶応義塾に学び明治八年東京で医術開業試験に歯科専門として出願した。本邦歯科医術の開祖であった。挿話として口頭試問には答弁流るるが如くして試験管をして感動せしめたとあるが当時の試験管理者東京医学校から内務省への報告書によれば、小幡の成績は「中の上」とあり伝説に過ぎないことが分かった。小幡は「東京医学会社」設立の一七四名の一人に載り、名利を求めず教育熱心で、早くから中津で私塾を開き多数の中津出身の歯科門下生がいる。

五、「田原淳と心臓刺激伝導系―原著からみる知られざる事実―」島田達生氏（大分大学）によるこれまた郷土中津の世界的医人田原淳の再発見と再認識の一席。心臓の教科書にヒス束とプルキンエ繊維の記載はあるが刺激伝導系という語源は見当たらない。詳細な顕微鏡写生と理論形成による心房心室間の規則的拍動の源は心筋自体の作用によるとする「筋原説」を実証したのが田原による一九〇六年ドイツ語版「哺乳動物の刺激伝導系」という単著であった。プルキンエやヒスはそれぞれ心室の心性膜下と膜内中隔に筋繊維が存在することを述べただけであって、プルキンエ繊維が伝導系の終末部であると結論づけたのは田原である。彼らの名前が残り、なぜ田原が消えたのか理不尽である。田原淳は一八七三年大分県国東郡の生まれで十七才で中津の医師田原春塘の養子となる。一高東大を経て三年間ドイツ留学を私費で果たした。この間凡そ実益とは程遠い経済支援をしつづけた養父の情熱とこれに見事に応えた才能がこの業績を生んだといって過言ではない。

一般講演はいずれも秀作が目白押しで会場が分かれたのが残念であったが、印象に残ったものを数席記します。

西巻明彦氏の『傷寒金鏡録』の思想についての考察―は傷寒論における舌診の重要性について薛己の考え方を踏まえて、現代に通じるものを感じました。

松木明知氏の『華岡流の麻酔法はなぜ幕末に急速に衰退したのか』は演者自身が麻酔学教授であったという立場から、また長年のライフワークというべき華岡外科研究の集約として興味深い。小川鼎三の唱える青州の秘密主義、そして藤野恒三郎の唱える高度すぎるテクニック説がいずれも衰退の理由として誤りと断定する。麻沸散による全身麻酔は決して行われなかったのではなく、応用性（即効性に欠ける）、調節性（覚醒が遅い）、適切性（服用のみなのと副作用あり）に欠けていたためで、エーテルとクロロホルムの普及に勝てなかったのです。

月澤美代子氏の『模倣の中の創意』は明治初年の人体解剖はとくに地方においては、数が不足して模型に頼ることとなる。その後も九大の模型などを分析すると独自の工夫と模倣が推移している。日本人の特性であるのだろうか。

片岡勝子氏の『江戸時代に製作された木骨に関する研究』は一八世紀末以降の星野、各務、奥田の各骨格模型の比較で、同じ疑問として精巧な器用さと工夫がみられるのは日本人特有のものなのだろうか。

田中誠二氏の『占領期における急性感染症の発生推移』は一九四六年から四八年までの最も疲弊し切った医療行政と、殆ど医療が麻痺状態であった時代の医師たちがどのようにこれら多くの伝染病に立ち向かったのか、大いなる興味を惹きました。

寺畑喜朔氏の『明治期における医学図書館の設立』は意外なところに意外な文庫や図書館があったものだと感慨ひとしお。維持することの難しさが今に伝わります。

山田英雄氏の『フーヘランドの長生法と日本の養生書の沿革』は中国由来の移入本養生書と貝原益軒の養生訓、そして西洋哲学からの深い熟成であったフーヘランドの長生法が現代の世界最長寿国日本での医学への長い繋がりとして無縁でなかったと感じます。

羽生和子氏の『江戸時代における輸入漢薬の流通について』は大坂道修町から江戸への薬品の出荷について、小口は陸送され多量のものは江戸積み廻船問屋が定期的に航海していたことが解る。特に興味深いのは長崎からの輸入経路が一八世紀の後半には確立していたこと。経口的消化薬の種類が多く、量的に見ても薬好きの日本人はすでにこの時代からあったのだと感じました。

吉元昭治氏の『中国伝統医学と道教（第二六回）陰隲文』は観念的なオカルトやお札や線香の煙といったイメージの道教の医学とはどういったようなものか、もう少し知りたかった。最後のところで仏教と儒教との融合点を説かれていて、ここももう少し知りたいと思いました。

最後に会場の案内、誘導、司会進行からIT操作と記録、はては弁当や湯茶の接待まで、東京からの派遣要員（受付）を除く大部分のスタッフは川嶌病院の現職員とお聞きしました。実にてきぱきと礼儀正しく卒なくこなされて感銘をうけました。押しかけた人々すべてになり代わり御礼申し上げます。第一〇八回総会もきっと成功するよう皆様のお力をお貸しください。

第一〇七回　日本医史学会総会

去る平成十八年五月十二日に理事・評議員会、十三日には総会が中津市文化会館において開かれました。左記の報告が承認され、協議事項はいずれも可決されました。

〔一〕報告事項

（一）平成十七年度庶務　報告

一、会員の動静

入会者　三十九名

退会者　五十四名

死亡会員　七名

岸本　頼子（十六年十二月二十四日）

森　重孝（十七年六月九日）

日比野　進（十七年六月十六日）

松田　武（十七年七月四日）

三島　濟一（十七年七月二十一日）

杉立　義一（十七年十一月二〇日）

山田　英雄（十八年二月六日）

都合退会者　四十七名

現在会員数　八六九名

正会員　八五二名（うち学生会員十五名、海外会員三〇名）

名誉会員　十一名
賛助会員　六名

二、受　賞
平成十七年　四月二十九日　瑞宝中綬章　中山　沃
平成十七年　十一月　三日　瑞宝中綬章　大島　智夫

（二）平成十七年度事業　報告
一、日本医史学雑誌　第五十一巻第二・三・四号、第五十二巻第一号　発行
二、日本医史学会会報　四十一号　発行
三、第一〇六回日本医史学会総会
平成十七年六月二十五日（土）～二十六日（日）
会長　小曽戸　洋
於・北里大学薬学部コンベンションホール
四、日本医史学会例会　八回開催（九月は神奈川地方会と合同開催・十二月は日本薬史学会・日本獣医史学会、日本歯科医史学会と四学会合同開催）
五、第一〇〇回総会記念事業【継続】
・「日本医事年表」の制作

（三）平成十七年度共催・協賛事業　報告
一、神農祭【協賛】於・湯島聖堂
平成十七年十一月二十三日（水）
二、第十三回医療文化史サロン展【後援】於・護王会館
平成十七年十一月一日（火）～三日（木）

（四）第十八回矢数医史学賞選考委員会　報告
平成十八年三月七日に開催された選考委員会において推薦のあった著書三点について慎重審査の結果、第十八回「矢数医史学賞」は寺畑喜朔氏の『絵葉書で辿る日本近代医学史』に決定した。

（五）第十二回学術奨励賞選考委員会　報告
役員の投票によって選出された上位三論文について、平成十八年三月二十三日開催の選考委員会において慎重に検討の結果、第十二回「日本医史学会学術奨励賞」は瀧澤利行氏の「近世地方藩医における文化活動と医師の教養形成　土浦藩医辻元順を例として」（日本医史学雑誌第五十一巻第一号掲載）に決定した。

（六）日本医史学会支部・研究会　報告（資料A）

（七）日本医史学会将来計画委員会　報告（資料B）

（八）その他

〔二〕協議事項

第一号議案　平成十七年度決算報告に関する件（資料1・2・3）

第二号議案　平成十八年度事業計画案に関する件

一、日本医史学会総会

第一〇七回日本医史学会総会

平成十八年五月十三日（土）～十四日（日）

会長　川嶌眞人

於・中津文化会館

第一〇八回日本医史学会総会

平成十九年四月七日（土）～八日（日）

会長　田中祐尾

於・大阪市立大学医学部学舎およびその付属施設

第一〇九回日本医史学会総会（秋季）

平成十九年十一月九日（金）～十二日（月）

西洋医学教育発祥百五十周年・長崎大学医学部創立百五十周年記念会

会長　相川忠臣

於・長崎大学医学部およびポンペ会館

二、第一〇〇回総会記念事業【継続】

・「日本医事年表」の制作

三、日本医史学会十二月例会・懇親会（日本薬史学会・日本獣医史学会・日本歯科医史学会と四学会合同開催）

【共催】於・順天堂大学

平成十八年十二月十六日（土）

四、神農祭【協賛】於・湯島聖堂

平成十八年十一月二十三日（木）

五、第十四回医療文化史サロン展【後援】於・護王会館

平成十八年十一月一日（水）～三日（金）

第三号議案　平成十八年度予算案に関する件（資料4）

第四号議案　役員改選に関する件（資料5）

第五号議案　『日本医史学雑誌』投稿規定改定に関する件（資料6）

〔三〕その他

平成１７年度　収支決算書

資料１

自　平成17年4月 1日
至　平成18年3月31日

（支　出　の　部）

科　　目	予　　算	決　　算	増　　減	備　　考
1. 学会誌等刊行費	5,000,000	3,802,843	△1,197,157	
2. 名簿刊行費	0	0	0	
3. 事　業　費	1,200,000	1,480,433	280,433	
（総　　会）		(934,847)		
（例　　会）		(254,990)		
（矢数医史学賞）		(172,516)		
（学術奨励賞）		(118,080)		
4. 事　務　費	820,000	482,302	△337,698	
5. 印　刷　費	80,000	66,600	△13,400	
6. 備　品　費	0	0	0	
7. 通　信　費	300,000	203,232	△96,768	
8. 人　件　費	1,500,000	1,315,700	△184,300	
9. 交　通　費	600,000	851,460	251,460	
10. 渉　外　費	100,000	24,504	△75,496	
11. 会　議　費	50,000	33,540	△16,460	
12. 雑　　費	10,000	6,090	△3,910	
13. 予　備　費	15,203	0	△15,203	
小　　計	9,675,203	8,266,704	△1,408,499	
次年度繰越金	0	1,217,759	1,217,759	
合　　計	9,675,203	9,484,463	△190,740	

平成１７年度　収支決算書

資料２

自　　平成17年4月 1日
至　　平成18年3月31日

（収　入　の　部）

科　　目	予　　算	決　　算	増　　減	備　　考
1. 会費収入	8,500,000	8,317,250	△182,750	
2. 入会金	100,000	56,000	△44,000	
3. 雑誌売上	100,000	152,500	52,500	ﾊﾞｯｸﾅﾝﾊﾞｰ
4. 著者負担	300,000	359,080	59,080	
5. 広告収入	200,000	137,600	△62,400	
6. 名簿代	0	6,500	6,500	
7. 集会費	30,000	36,500	6,500	
8. 助成金	200,000	200,000	0	
9. 寄付金	0	5,000	5,000	
10. 利息	0	0	0	
11. 雑収入	50,000	18,830	△31,170	印税他
小　　計	9,480,000	9,289,260	△190,740	
前年度繰越金	195,203	195,203	0	
合　　計	9,675,203	9,484,463	△19,0740	

資料 3

資　産（平成 18 年 3 月 31 日現在）

1．一般会計　1,217,759（現金 129,850　預金 1,087,909）
2．特別会計　6,980,277
3．矢数医史学賞基金　5,544,275
4．斉藤脩基金（日本医史学会学術奨励賞基金）
　　1,500,000
計　15,242,311

内　訳

特別会計

支　出		収　入	
次年度への繰越金	6,980,277	前年度より繰越金	6,980,232
		利息	45
合　計	6,980,277	合　計	6,980,277

矢数医史学賞

支　出		収　入	
次年度への繰越金	5,544,275	前年度より繰越金	5,520,665
		利　金	23,610
合　計	5,544,275	合　計	5,544,275

平成 17 年度一般会計および特別会計について、収支計算書その他の書類を監査した結果、正確かつ妥当であることを認めます。

平成 18 年 4 月 7 日

監　事　石原　力

監　事　高橋　文

資料4

平成18年度予算表（案）

自平成18年4月1日～平成19年3月31日

支出の部	前年度（平成17）予算	本年度（平成18）予算	前年度との比較	備考	収入の部	前年度（平成17）予算	本年度（平成18）予算	前年度との比較	備考
1. 学会誌等刊行費	5,000,000	4,500,000	△ 500,000		1. 会費収入	8,500,000	8,500,000	0	
2. 名簿刊行費	0	0	0		2. 入会金	100,000	100,000	0	50名
3. 事業費	1,200,000	2,000,000	800,000		3. 雑誌売上	100,000	100,000	0	
4. 事務費	820,000	700,000	△ 120,000		4. 著者負担	300,000	100,000	△ 200,000	
5. 印刷費	80,000	80,000	0		5. 広告収入	200,000	200,000	0	
6. 備品費	0	100,000	100,000		6. 名簿代	0	0	0	
7. 通信費	300,000	300,000	0		7. 集会費	30,000	30,000	0	
8. 人件費	1,500,000	1,600,000	100,000		8. 助成金	200,000	1,700,000	1,500,000	
9. 交通費	600,000	850,000	250,000		（日本医学会）		200,000		
10. 渉外費	100,000	100,000	0		（日本学術振興会）		1,500,000		
11. 会議費	50,000	100,000	50,000		9. 寄附金	0	0	0	
12. 雑費	10,000	10,000	0		10. 利息	0	0	0	
13. 予備費	15,203	1,657,759	1,642,556		11. 雑収入	50,000	50,000	0	登録・委託
					前年度繰越金	195,203	1,217,759	1,022,556	
合　計	9,675,203	11,997,759	2,322,556		合　計	9,675,203	11,997,759	2,322,556	

資料5

日本医史学会役員一覧（五〇音順・敬称略　○は新任）

理事長　○酒井シヅ

常任理事　○奥沢康正、○蒲原宏、小曽戸洋、深瀬泰旦

監事　石原力、高橋文

理事　遠藤正治、○川嶌眞人、蔵方宏昌、○坂井建雄、新村拓、杉田暉道　○田中祐尾、寺畑喜朔、戸出一郎、○中西淳朗、中橋彌光、松木明知、松下正明、真柳誠、ヴォルフガング・ミヒェル、吉田忠

評議員　相川忠臣、会田恵、青木國雄、青木允夫、赤祖父一知、荒井保男、泉彪之助、岩崎鐵志、遠藤次郎、大島智夫、○岡田靖雄、小形利彦、奥村武、小田晧二、片岡勝子、片桐一男、加藤四郎、唐沢信安、北小路博央、小石秀夫、榊原悠紀田郎、渋谷鉱、島田保久、白崎昭一郎、○鈴木晃仁、高橋昭、瀧澤利行、立川昭二、多留淳文、友吉唯夫、中村定敏、長与健夫、○中山沃、○西巻明彦、原敬二郎、原田康夫、樋口誠太郎、昼田源四郎、藤倉一郎、正橋剛二、町泉寿郎、松尾信一、室賀昭三、山内一信、山田光胤

幹事　蔵方宏昌、○西巻明彦、真柳誠

名誉会員　江川義雄、大滝紀雄、大塚恭男、木村陽二郎、酒井恒、高島文一、○津田進三、土屋重朗、長門谷洋治、○三輪卓爾、○森納、谷津三雄、矢部一郎、山本俊一

編集委員　編集長　坂井建雄

委員　蔵方宏昌、鈴木晃仁、瀧澤利行、中西淳朗、西巻明彦、町泉寿郎

資料6

投稿規定改訂（案）

一

現行　本誌に掲載する論文は医史学研究に貢献しうるもので他誌に未発表のものとする。

改訂　本誌に掲載する論文は医史学研究に貢献しうるもので他誌に未発表のものとし、生命倫理および個人情報保護に配慮されたものとする。掲載された論文等の著作権は本学会ならびに著者に帰属するものとする。

四　執筆要項d

現行　原稿の末尾に著者の所属および連絡先を記載すること。

改訂　原稿の冒頭にタイトル、著者名、著者の帰属等を記載すること。

六

現行　投稿原稿はコピーを一部添付すること。原稿は…

改訂　投稿原稿は、コピーを一部添付すること。ワープロで執筆の場合はプリントアウト二部のほかに、電子データ（CD―R、フロッピーディスク等）を添付すること。原稿は…

資料（B）

平成十八年二月二十五日

日本医史学会理事長
蒲原　宏　殿

日本医史学会将来計画委員会
委員長　松木　明知
委　員　泉　彪之助
岡田　靖雄
奥沢　康正
蔵方　宏昌
小曽戸　洋
佐藤　裕（委員は五十音順）

日本医史学会将来計画委員会は日本医史学会理事会からの委嘱のあった諸問題について下記のように答申する。

答申案

一、財政の健全化について…財政健全化のためには、先ず支出削減を図る必要がある。支出中、最大の学会誌等刊行費を前年度会費収入の五十五％に抑制する必要がある。しかし学会誌に占める研究論文の頁数の大幅な減少を避ける

ことは可能である。名簿発行は五年毎とし、年一回の会報発行は止めて、学会誌に会報欄を設けて対処する。総会援助費は三十万円に下げる。学会賞の経費は見直して特別会計から支出する。前年度会費収入を基準にして学会誌刊行の予算を組むため、上記により約七十～一〇〇万円の節約になり、赤字になることはない。

会員増による収入増は当分の間見込むことはできない。収入増のため会費の値上げは最も安易な道であるが、医師以外の会員もいることから却って会員の減少を招く恐れがある。掲載料の値上げも若い会員の負担増に繋がる。したがって会費及び掲載料の値上げは行わない。また少額の寄付も円滑にできるようにすることが望ましい。

二、役員人事について…役員の選出について、選出の過程の情報が会員に十分伝えられていない。若手会員の育成も重要な課題であるため、役員の定年制（七十二～七十五歳、理事長は七十五歳）を設ける必要がある。役員の選出は選挙によることが望ましいが、費用と時間を要することから、しばらくは実績を考慮し、各地区からの推薦による方式も採用する。名誉会員の資格についても再考する必要がある。

三、会員減少について…ここ数年間入会者数は横ばいであるが、本学会では高齢者会員が多いことから、退会者数が入会者数を上回っている。この状況は今しばらく続くと思われる。しかし会員増は会費の増収にも繋がる問題でもあり、学会として真剣に取り組み、会員一人一人もこの問題に危機意識を以て対処する必要がある。

四、学術大会について…学会会長は立候補制として、評議員会の選挙で決定する。また学術大会プログラムの中に社会や他学会との接点を有する企画が含まれていることが望ましい。一般市民に対する医学史の啓蒙の企画も必要である。

五、上記の答申案を実行するためには会則の変更が必要である。このため早急に会則改定委員会の発足が望まれる。

（資料A）

平成十七年度支部研究会報告

平成十七年度北海道医史学研究会　報告

○年次総会　平成十七年十二月十日（土）午後二時
於　北海道医師会会館

議題及び承認事項

一、庶務会計報告
平成十七年十二月十日現在の会計残高及び会員について報告、承認。

二、役員の選任について
新幹事に秦温信氏を選任、編集委員を担当。
斎藤元護氏を相談役に選任。

三、平成十八年度の活動について研究会の活性化について検討。

四、「北辰」第七号の発行について平成十八年三月一日発行予定。

○会員活動
古屋　統（執筆）「北海道労働衛生メモ」
季刊『北の産業保健』
二〇〇一年～二〇〇五年連載
島田保久（講演）「関場不二彦先生」関場不二彦生誕一四〇年記念講演（市民公開講演）
札幌社会保険総合病院講堂　二〇〇五年十一月七日

〒〇六〇―〇〇四二
札幌市中央区大通西六丁目北海　道医師会内
北海道医史学研究会（島田保久）

平成十七年度新潟支部　報告

活動報告（平成十七年一月一日～十七年十二月三十一日）

（一）支部は前年通り日本歯科大学新潟歯学部　医の博物館内

（二）支部会員の学術発表は左記のようであります。

①第一〇六回日本医史学会総会発表
『杏蔭斎正骨要訣』の校訂者和田謙堂の家系と同書の成立年代　蒲原　宏
『口歯類要』の治療範囲　西巻　明彦
明治一二年に東京府病院が実施した医術開業旧試験について　樋口　輝雄

②第三三回日本歯科医史学会総会
『傷寒金鏡録』の研究　西巻　明彦
「他者」の視点でみる病草子（その4）　西巻　明彦
芭蕉の「軽み」と歯科病変（3）　西巻　明彦
鷗外の都市美論　西巻　明彦

明治中期のお歯黒習俗について
和歌山県の歯科医中村好正述「明治二五―二六年来患者中涅歯者ノ統計報告より」　樋口　輝雄
小幡英之助の受験願書と試験成績について
―内閣文庫蔵『東京府史料・政治部衛生明治八年』より―　樋口輝雄・中原　泉

③柏崎市刈羽郡医師会学術大会（創立八十年記念）
青い眼の近代医学の助っ人たち（新潟県を主とした）　蒲原　宏

④新潟における天児民和先生の業績
天児民和先生生誕百年記念会（九州大学整形外科学教室）　蒲原　宏

⑤近代西洋医学の地方での受容―宇田川榕庵と見附市―
見附市医師会創立八十周年記念大会　蒲原　宏

⑥日本天才列伝　荻野久作（学研刊）　蒲原　宏

⑦郷土の碩学　島峯徹・入沢達吉・長谷川泰・中田瑞穂（新潟日報事業社刊）　蒲原　宏

⑧整形外科看護一〇巻一号―フィンランド・エストニア・アイスランド・チェコ・スロバキア・ルーマニア・ブルガリア・ハンガリー・ユーゴスラビア・ロシア・イタリアの十九世紀から二〇世紀の整形外科発達史　蒲原　宏

〒九五一―八五八〇　新潟市浜浦町一―八
日本歯科大学新潟歯学部医の博物館内
電話　〇二五―二六七―一五〇〇
FAX　〇二五―二六七―一一三四
日本医史学会新潟支部（蒲原　宏）

平成十七年度北陸医史学同好会　報告

平成十七年度の本会総会は、二〇〇五年七月十一日、高岡市ウイングウイングにおいて開催された。特別講演として高岡歳寿氏の「地域蘭学のめざすもの、北陸と上方・江戸」が行われ、北陸が蘭学全盛期に決して草深い片田舎でなかったことを強調され、会員に深い感銘を与えた。

一般演題としては左記八題が提出された。これは従来の本会に比して、質量共に充実していた。

一、大槻磐渓から長崎浩斎への新出書簡　正橋　剛二（富山県）
二、高岡人気質と風習としての天神祭　飛見　立郎（富山県）
三、能登の究理堂門人　原　吉博（石川県）
四、越前三国・真田家伝来の医書群について　白崎昭一郎（福井県）
五、軍陣での「生体解剖」の実態について

—日本の十五年戦争中の—　莇　昭三（石川県）
六、田中信吾関連資料　赤祖父一知（石川県）
七、金沢大学医学部細菌学初代土田計二教授について　寺畑　喜朔（富山県）
八、スロイス講義から　植物講義とオーデマン植物図譜の関係、薬剤学「水の分析」の底本について　板垣　英治（石川県）

なおその内容については「北陸医史」二十七巻一号をご参照頂きたい。

また終了後、一部有志によって高岡の蘭学史跡めぐりが行われた。

〒九一〇—〇六〇一　福井市大願寺三丁目四—一〇
福井県医師会館内
北陸医史学同好会・日本医史学会北陸支部（白崎昭一郎）

平成十七年度神奈川地方会　報告

活動報告（平成十七年一月一日～十二月三十一日）

▽大会

一、平成十七年度総会並びに第二十六回学術大会（二月二十六日）　於・鶴見大学歯学部三号館

〔特別講演〕
一、血圧測定の歴史　杤久保　修
二、歯科保健医療史　榊原悠紀田郎
二、日本医史学会九月例会・神奈川地方会第二十七回学術大会合同会（九月十七日）　於・神奈川県救急医療中央情報センター

〔一般口演〕
一、ウルソデオキシコール酸（UDCA）の発見　佐分利保男
二、矯正給食から窺える庶民の日常食の史的観察　日野　英子
三、明治期の精神病院に於ける看護婦養成について—府立巣鴨病院の実態から　澤田　恵子
四、黒死病はペストか—黒死病の謎　滝上　正

▽幹事会

・四月二十二日、十月二十八日に開催し、学術大会等について協議した。

▽その他

・神奈川地方会だより第十四号と会員名簿を作製し、八月に会員に配布した。

〒二三一—〇〇二二　横浜市中区日本大通五八
日本大通ビル神奈川県予防医学協会内
日本医史学会神奈川地方会（杉田暉道）

平成十七年度東海支部　報告

活動報告

一、名古屋医史談話会例会（東海支部主催）
　　於・愛知県医師会館
　第三十八回例会「永田徳本とP・A・パラケルスス」
　　（平成十七年十一月五日）　山田英雄
二、名古屋医史談話会会報第三十六号を発行
三、土井康弘著『日本初の理学博士　伊藤圭介の研究』
　出版記念会（平成十七年十一月六日）午前十時―十二時
　　（於・名古屋市東山植物園）
【記念講演】
「日本初の理学博士　伊藤圭介の研究」　土井　康弘
四、伊藤圭介日記（第十一集）出版記念会（東海支部後援）
　　平成十七年十一月六日　午後一時―四時
　　（於・名古屋市東山植物園）
【記念講演】
「シーボルト用薬の植物と『泰西本草名疏』」　遠藤　正治
「伊藤圭介の医学とその周辺」　杉村　啓治
「お雇い米国人と伊藤圭介」　財部　香枝
「西岡　昭著『緒方暢之』書状について」　岩崎　鐵志
「『錦窠蟲譜』の再構成」　島岡　真
五、その他の関連事項名誉会員日比野進先生は平成十七年六月十六日に、また評議員山田英雄先生は平成十八年二月六日にご逝去されました。ここに慎んで哀悼の意を表します。
　〒四六六―八五六〇　名古屋市昭和区鶴舞町六五番地
　名古屋大学大学院医学系研究科医療管理情報学教室
　日本医史学会東海支部（山内一信・高橋　昭）

平成十七年度関西支部　活動報告

活動報告

（一）日本医史学会関西支部二〇〇五年春季大会（京都医学史研究会と共催）
　　平成十七年六月十二日（日）　於・京大会館

一般演題

一、英国史～二〇紀の例　再考　栗本　宗治（大阪医大）
　　サー・ゴードン・ロブスン（ロンドン大）
二、先秦食人風習と臓腑認識　猪飼祥夫（大津市）
三、二宮尊徳の死因　杉浦守邦（大津市）
四、近代日本における公的職業資格制度と看護の資格
　　滝下幸栄・岩脇陽子（京都府立医大）
五、小倉金之助・大阪医科大学数学教授　飯塚修三（西宮市）
六、エルメレンス先生記念碑文撰者
　　坂谷朗盧　小田皓二（井原市）

七、「京都医事衛生誌」と竹岡友仙　奥沢康正（京都市）
八、能登の究理堂門人　安田元蔵について　佐原吉博（七尾市）　寺畑喜朔（高岡市）
九、明治初期の医科器械製造販売について―大阪を中心に　ヴォルフガング・ミヒェル（九州大）

紙上発表

「親試実験」考（その二）　小曽戸明子（八王子市）
来日医療宣教師（Medical Missionary）のみた明治中期の日本の医療　野尚　香（豊中市）

特別演題

一、元禄時代の百科全書「錦嚢智術全書」に見る生活の知恵　高橋　雅夫
二、京都医会の創設をめぐって―竹岡友仙「半百録」の記事から―　八木　聖弥

（二）日本医史学会関西支部二〇〇五年秋季大会
平成十七年十一月六日（日）
於・大阪市立大学医学部学舎・四階中講義室

一般演題

一、W・Harvey再考　栗本　宗治（大阪医大）　サー・ゴードン・ロブスン（ロンドン大）
二、漢代の「塞玉について」　猪飼　祥夫（大津市）
三、山鹿素行の死因　杉浦　守邦（大津市）
四、大阪で初開催された第三回日本医学会総会と医史学について　奥沢　康正（京都市）
五、フローレンス・ナイチンゲールとルイザ・トワイニング　上坂　良子（和歌山医科大）
六、平野の除痘館について　古西　義麿（橋本町角博物館）
七、適塾門下生金光廉平―第二報―　木村　丹（岡山県早島町）　松田　俊悟（元山陽新聞社）
八、岡山医学校で教職についた金沢医学校卒業生　寺畑　喜朔（高岡市）
九、澤瀉久敬（オモダカ　ヒサタカ）大阪大学文学部教授と医学概論　飯塚　修三（西宮市）
十、収蔵明治十一年創刊「刀圭雑誌」について　田中　祐尾（八尾市）
十一、扶氏医戒と坂谷朗廬　小田　皓一（井原市）
十二、石坂堅壮の地図「摂海一覧」と「小学養生読本」　中山　沃（西宮市）

誌上発表

一、「親試実験」考（その三）　小曽戸明子（八王子市）
二、京都看病婦学校　アイダ・スミスに関する記録　小野　尚香（豊中市）

ミニシンポジウム

大坂の蘭学史―その二―その展開と特徴そして背景

司会　中山沃　パネリスト　小石秀夫・古西義麿・芝　哲夫・浅井允晶・Wミヒェル

（三）機関誌『医譚』

八十二号発行　平成十七年三月三十一日

八十三号発行　平成十七年十一月三十日

七十八号より事務局に在庫有り。定価各千円

（四）関西支部ホームページ開設 http//mhkansai.umin.ne.jp/

貴重な医学遺産、史跡などの紹介や情報交換などをお寄せ下さい。

同事務局または田中祐尾個人　sachio-tanaka@umin.ac.jp

（五）第一〇八回日本医史学会総会（日本医学会総会第一分科会）開催に関する続報

（現在までの内定分）

日　時　平成十九年四月七日（土）八日（日）

会　場　大阪市立大学医学部学舎と関連施設―大阪市阿倍野区旭町

（大会名誉会長）長門谷洋治（同会長）田中祐尾（実行委員）学術担当：寺畑喜朔、中橋彌光、中山沃、芝哲夫、浅井允晶、小石秀夫・古西義麿、W・ミヒェル　運営・奥沢康正　八木聖弥　IT担当・園田真也、猪飼祥夫、田村哲二、五十嵐麻子　ほか

（メインテーマ）庶民の町大坂における医学の奇跡

（招待講演）煙の町から住み心地よき街へ

―関一（せきはじめ）と近代大阪

ジェフリイ・ヘインズ（オレゴン大学）

（特別講演）大坂の蘭学―とくに人体解剖について―

酒井シヅ（順天堂大学）

（会長講演）近世自家医学遺産の諸分析

田中祐尾（大坂市立大学）

（シンポジウム）「大坂の蘭学史―その背景と展開そして特徴

中山沃、小石秀夫、古西義麿、芝哲夫、浅井允晶、W・ミヒェル

（展示）「近世から明治への大坂の医学」彌性園文庫（八尾市田中家）、「出土した中国古代医学文物」猪飼祥夫（北里研究所、龍谷大学）、「近世大坂を巡る医人の肖像」（仮題）杏雨書屋、「鍼灸医学の歴史」（仮題）大阪鍼灸ミュージアムなど

〒五五八―〇〇〇三　八尾市本町五丁目一―七

田中医院内

日本医史学会関西支部

第一〇八回日本医史学会総会（大阪）事務局を兼ねる

事務局長　田中　祐尾

（電話　〇七二九―二二―二〇二八）

（FAX　〇七二九―九三―一二三七）

平成十七年度広島支部　活動報告

活動報告

日本医史学会広島支部総会・学術集会

平成十七年九月十一日（日）午後一時～

於・広島大学医学部広仁会館大集会室（二階）

一、日本医史学会広島支部総会

二、特別講演会

「江戸時代の人体観」について　順天堂大学　酒井シヅ

三、日本医史学会広島支部研究発表

（一）日清戦争にともなうコレラの流行と対策

―広島を例として―　広島国際大学　千田武志

（二）江戸時代に制作された木骨に関する研究

広島大学　片岡勝子

広島大学　洲崎悦子

広島大学　安嶋紀昭

国立科学博物館　馬場悠男

（三）『身幹儀説』について　広島大学　狩野　充

〒七三二―八五五一　広島市南区霞一丁目二―三

広島大学医学部医学資料館内

日本医史学会広島支部（片岡勝子）

平成十七年度福岡地方会　活動報告

活動報告

平成十八年二月十八日（土）アクロス福岡（福岡市中央天神）にて福岡地方会を実施した。

演題五題、特別講演で盛会であった。

一般演題

一、豊後杵築の医学史　麻田剛立と小川鼎三　佐藤　裕

総会が行われる大分県中津を少し南へ下った杵築は国東半島にあり、古くから仏教文化が栄え、文化人が多数輩出している。偉人たちと医史学の先達との交流を中心に述べた。尚中津での総会に詳述される予定。

二、中津の学会のこぼれ話　中山　茂春

福沢諭吉と筑後久留米藩医松下元芳、適塾開講からの塾頭と主な入門者を述べタイトルの二人の交友と人となりについて。黒田如水と中津観光名所赤壁（合元寺）、黒田如水が中津藩主であった時抵抗勢力を如何に謀殺したか。又その寺が観光名所として脚光を浴びていることなど。奥平神社の絵馬「鳥居強右衛門が川を渡る姿」演者の中山氏は、代々の医家であるがその作者は筆者の遠祖の一人であること。

三、韓国の薬物市場を見学して　山下　嘉昭

国際東洋医学会が韓国で本年行われた後見学した生薬市場の見学記

四、去来の父、向井元升について　木村専太郎

貝原益軒の師、肥前の医師向井元升は俳人向井去来の父であり、儒医として三人の息子を得、去来は次男で三男の元成は長崎に孔子廟を再建しその祭酒となった。元升の墓は京都眞如寺にあり墓碑文は益軒が書いている。

五、山口県下関市の漢方医細迫家とその蔵書について　藤田　理子

明治から昭和まで衰亡した漢方医学を支えた医師、細迫陽三氏の蔵書、主として漢方医学の　図書を調査したもの。

特別講演

「種痘の祖、緒方春朔」を出版して　冨田　英壽

西日本新聞社より平成十七年に出版されたのを記念しての特別講演。六十七に及ぶ参考文献、世界の天然痘史、春朔の著書、種痘必順辨の解説、春朔の遺誌顕彰まで詳細な構成の大著であり感銘を深めた講演であった。

終わって役員の懇談会を行い福岡地方会を向後福岡支部会と改称することなどが決議された。

その他の福岡地方会の活動

福岡県医報「福岡の先賢医師」に連載。役員が交代で執筆し、同医報で最長寿連載となり目下記録更新中。

亀井南冥の師、永富独嘯庵について　木村専太郎

緒方洪庵と久留米藩の医師達　中山　茂春

久留米藩半井家　原　敬二郎

などである。

〒八一五―〇〇四二　福岡市南区若久一―二八―五
日本医史学会福岡地方会　原クリニック（原敬二郎）

雑　報

寄贈本リスト

（単行本）

中村光夫『東京の痘瘡神』二〇〇六
中村光夫『千葉の痘瘡神』二〇〇六
川嶌眞人『水滴は岩をも穿つ』「梓書院」二〇〇六
中野卓、中野進『昭和初期一移民の手紙による生活史　ブラジルのヨッチャン』「思文閣出版」二〇〇六
（財）黒住医学研究振興財団『小島三郎記念技術賞　福見秀雄賞　受賞業績集』二〇〇六
（社）日本整形外科学会『日本整形外科学会八〇年史』二〇〇六
深瀬泰旦『肥前佐賀文庫〇〇二わが国初めての牛痘種痘楢林宗建』「出門堂」二〇〇六
島根大学附属図書館医学会館『講演会「島根にもたらされた華岡流医術―大森文庫から見た江戸後期の診療」DVD』二〇〇六
篠田達明『歴代天皇のカルテ』「新潮社」二〇〇六
樋口輝雄『明治医師人名鑑』二〇〇六
新村拓（編）『日本医療史』「吉川弘文館」二〇〇六
堀田慎一郎『農学部の誕生と安城キャンパス―学部の誕生と草創期①―』
「名古屋大学大学文書資料室」二〇〇六
三枝純郎『肛直外科迫害史』「羽衣出版」二〇〇六
日本医歯薬アカデミー『日本学術会議第七部の歩み　第七部会委員の思い出と格言』「一二〇〇六
荒井保男『生きる糧となる医の名言』「中央公論新社」二〇〇六
吉元昭治『五〇代からの健康ハンドブック』「勉誠出版」二〇〇五
中村光夫『牛痘啓蒙引札集』二〇〇五
中村光夫『痘瘡口訣（五）面部観察之図』二〇〇五
中村光夫『埼玉の痘瘡神』二〇〇五
二宮陸雄『新編　医学史探訪』「医歯薬出版」二〇〇六
末永惠子『戦時医学の実態　旧満州医科大学の研究』「樹花舎」二〇〇五
大阪大学医学部第一内科開講一〇〇周年記念事業実行委員会『大阪大学医学部第一内科開講一〇〇周年記念誌』二〇〇五
日本医学会『第一二九回日本医学会シンポジウム記録集　うつ病』二〇〇五
新村拓『健康の社会史　養生、衛生から健康増進へ』「法政大学出版局」二〇〇六

（別　刷）

『切手・医学史をちこち四一―四三』金山知新「医学のあゆみ」二一一三（九、一三）、二一一三（四）

『桂田富士郎と日本住血吸虫発見一〇〇年』小田晧二「岡山医学会雑誌」一一七
『緑陰閑話「宗教改革者カルヴァンと医学者たち、晩年の病など」』濱中淑彦「名古屋市報」（一二八六）
『宗教改革者カルヴァンが病苦を訴えた晩年の一書簡』濱中淑彦「名古屋市医報」（一二八七）『仁寿山雑記』藤戸孝純「姫路市医師会報」別冊
『幕末大坂の医学塾に関する一考察―適塾と華岡塾・合水堂を中心に―』古西義麿「日本文化の諸相」
『「種痘の祖　緒方春朔」を上梓して』冨田英壽「甘木朝倉医師会雑誌」（一七）
『全国各地を廻遊する医者について―出雲国楯縫郡平田町長崎賢斎の学問・医学修業と医療活動―』梶谷光弘「古代文化研究」（一四）
『（続）阿蘭陀から日本恋しや―長崎丸山遊女お文（ふみ）の手紙―』川島恂二「古河市医師会報」（三六）
『十八世紀イングランドにおける病院の発展―Voluntary Hospitalsの設立を中心として―』柳澤波香「津田塾大学紀要」（三三）
『The Establishment of the London General Institution』柳澤波香「The Tsuda Review」（四六）
『イングランドに現存する最古の病院―セント・バーソロミュー病院―』柳澤波香「津田塾大学紀要」（三六）
『漢方製剤健保収載三〇周年記念原稿』菊谷豊彦「漢方の臨床」五三（九）
『「世界の弾者」鈴木拙のつぶやき―鴎外、漱石、大拙―』葛谷登「言語と文化」（一二）

（雑　誌）

『あいみっく』二五（三）、二六（一）「国際医学情報センター」
『BIBLIA』（124-125）「天理図書館」
『Capsule』（81-83）「日本製薬工業協会広報委員会」
『Chinese Medical Journal』118（13-24),119（1-12）「Chinese Medical Association」
『千葉県立中央博物館研究報告　人文科学』九（一―二）「千葉県立中央博物館」
『福井県医師会だより』（五三一―五四四）「福井県医師会」
『ぐんしょ』一八（四）、一九（一―二）「続群書類従完成会」
『いわちどり（小笠医師会誌）』（三三）「小笠医師会」
『医道の日本』六四（九―一二）、六五（一―一〇）「医道の日本社」
『漢方の臨床』五二（九―一二）、五三（一―一〇）「東亜医学協会」
『神奈川県医学会雑誌』三二（二）、三三（一―二）「神奈川県医師会」
『啓迪』（二四）「京都医学史研究会」
『Korean English Science and Technology』2005（Dec.),2006（Jan.）「Korean Institute of Science & Technology

Information」
『明治薬科大学研究紀要』（三五）「明治薬科大学」
『名古屋大学史紀要』（一四）「名古屋医史談話会」
『鳴滝紀要』（一六）「シーボルト記念館」
『日本医師会雑誌』一三四（六―一二）、一三五（一―七）「日本医師会」
『日本歯科医史会会誌』二六（二―四）「日本歯科医史学会」
『日本獣医史学雑誌』（四三）「日本獣医史学会」
『ねりま（練馬区医師会雑誌）』一二「練馬区医師会」
『だより（練馬区医師会）』（四五〇―四六二）「練馬区医師会」
『労働科学』八一（三―四）、八二（一―二）「労働科学研究所」
『労働の科学』六〇（八―一二）、六一（一―十一）「労働科学研究所」
『STETHOSCOPE』（183-185）「日本医学切手の会会報」
『東医学研究』（一一七―一二七）「東医学研究会」
『慾斎研究会だより』（一〇六―一〇九）「慾斎研究会」
『洋学史研究』（二三）「洋学史研究会」
『漢方と鍼』二九（三―四）、三〇（一―四）「北里研究所東洋医学総合研究所だより」
『Medical Postgraduate』43（4), 44（1-4）「医学書房」
『斯文会々報』五四、五六「斯文会」
『Journal of Anesthesia』20（Suppl.）「Japan Soceity of Anesthesiologists」
『医事学研究』（二〇）「岩手医科大学医事学研究会」
『JMAJ』48（7-12), 49（1-8）「Japan Medical Association」
『醫譚』八四「日本医史学会関西支部」